

安西 晋一 提出 学位申請論文（課程博士）

『反復と変形の文学―近代小説における準拠の方法―』 審査要旨

### 論文の内容と要旨

学位申請論文である安西晋一「反復と変形の文学 ―近代小説における準拠の方法―」は、序章「反復と変形―翻案・引用、そして方法としてのパロディ―」第一部「準拠の構造とパロディ―澁澤龍彦の方法―」、第二部「典拠をめぐる方法」、第三部「変奏される〈音楽〉」、終章「結論と課題」という構成をとり、四百字詰原稿用紙換算六百九十九枚に及ぶ論考である。

序章「反復と変形―翻案・引用、そして方法としてのパロディ―」において、本論文の研究テーマとその意義、また、研究方法に関わる理論的な説明がなされている。本研究は、日本近代文学の作品が典拠をどのように運用しているかとい

う準拠の方法を追究するものであり、具体的には、原典からの翻案・引用が存在すると認定される作品においては、オリジナルに対するレプリカとして劣位にあると評価される傾向にあった価値観を改め、これらの現象をテキストにおける典拠の反復／変形と積極的に捉えなおし、その操作における価値を新たに見出そうとする試みである。文学作品における先行テキストの反復とは、概念的あるいは文面的なテキストの変形として現象し、典拠との差異を生み出すに至る。すなわち、本研究は、こうした反復／変形のプロセスから明確化するテキスト間の差異の生成に注目し、その要因を明らかにした上で当該作品の新たな評価を試みる。また、その差異がパロディとしての批評性を読者に対して喚起する契機となることについても考察する。

第一部「準拠の構造とパロディ―澁澤龍彦の方法―」では、澁澤龍彦の小説作品における典拠の運用方法を析出する。周知のように澁澤作品には複数の典拠が複合的に用いられており、その指摘については先行研究も多いが、本研究におい

てはそこに基本的な準拠の構造が存在し、その追究が澁澤龍彦作品の積極的な評価をもたらすことを述べる。具体的には澁澤作「撲滅の賦」の典拠である埴谷雄高の小説「意識」を比較考察し、その引用による反復／変形操作によって、語り手「私」の自意識を導くへ眼〆とへ目〆のイメージを埴谷作品から反復しながらも「自意識」を焦点化するところに作品の特質を見ている。また、澁澤自身が被告として法廷に立ったいわゆる「サド裁判」が猥褻か否かという闘争と見えながら、その裁判闘争自体をパロディ化した作品「エロティック革命」に注目しつつ、そこに猥褻裁判の被告である澁澤龍彦を自らパロディ化することで世上に流布している自己像を解体しようとするもくろみを見る。また、『唐草物語』では、この連作短編小説に一貫して登場する「私」が、澁澤の過去のエッセイ等の自作を典拠として運用するという内容を有し、これが語り手「私」と接続されてその作家としての「私」像の強度を高めていると論じる。最後の「ねむり姫」論では、藤原定家『明月記』、『古今著聞集』などの一節を引用し、虚構の物語を生

成しながら史実や典拠を随所に織り交ぜることで、典拠の持つ歴史的な信憑性に基づくリアリティを利用しながら、虚構の物語世界を展開していくという独自の方法を考察する。

第二部「典拠をめぐる方法」は、芥川龍之介、中村真一郎、太宰治、石川淳、そして三島由紀夫という大正期から昭和戦後期の文学表現を通観するかたちでそれぞれの作品における準拠の方法、反復／変形の具体相が検討されている。そして、ここで扱われる諸作品の典拠と指摘できるものが日本古典文学や歴史的な史料ということも注意される。つまり、日本の近現代小説の成立に関する一つの特性を準拠という方法で考察することで、日本近現代文学史の一側面を照射しようという企図を持つ考察でもある。芥川作「六の宮の姫君」論では、典拠との密着性から独創性の低さがこれまで指摘されてきたが、物語を語る行為の位相における文体分析から典拠との「批評的距離」が検討される。中村作品では近世文学を吸収しようとした創作意識を学生時代の日記に見る試み。太宰治「女の決闘」論

は、当該作品内部に引用される森鷗外訳の同名作品からの引用と、語り手による批評・加筆を明示的に行使する小説であり、そこに森鷗外に代表される日本近代小説の表現、自然主義的リアリズムの描写、また言表行為主体「私」への批評をも含みつつ、太宰自らの表現方法をも小説化したという特質を分析する。そして、「女の決闘」への先行研究論文自体にあっても、テキストにおける反復／変形によって文学研究というメタ言説が生産・消費されてきたとして、その様相を俎上にあげて批判検討する。また、石川淳作品への考察においては、その歴史小説批判を軸にしながら、歴史を語る主体の問題を、作中でどのように展開し模索を続けていったのかを検討し、「普賢」、「諸國崎人傳」、「修羅」を中心に文体としての「説話体」、歴史を語る方法、そして史実を反復／変形し、固定化された歴史を批判する物語の「批評的距離」について考察する。三島作品「橋づくし」では、そのエピソードに置かれた近松門左衛門「心中天網島」の一節に注目し、この言説が作品の読みの中でいかなる作用を及ぼしているかを物語言説の分析から検討

し、単なる準拠ではなく、物語内容における対照性をあぶり出す構造を生成するものであると指摘する。

第三部「変奏される〈音楽〉」は、明治四十年代から顕著になる西洋音楽の受容史を繙きながら、多様な言説において記入され、言語化されていく西洋音楽の様相を、文学テキストとして反復／変形されていく事象とする本研究の理論的視座から分析するものである。また、これは第二部までの文学が文学を反復／変形するというプロセスではなく、耳で聞き取られた音楽が言語へと変換された言説を分析することで、本研究の拡張を図ったものでもある。具体的には、永井荷風「新帰朝者日記」で語り手「私」が自ら演奏するショパンの調べをいかに表現化していくかを分析し、洋楽受容のあり方とともにそれへの批評性をも指摘する。福永武彦「私の内なる音楽」では、音楽を聴くという行為主体「私」が、シベリウスの曲を自らの文学的志向性と接続させ、二つを交響させていくかのような語り方に注目し、そこに福永自身の「内部」の発見があったことを論じる。ま

た、吉田秀和による永井荷風論を取り上げ、荷風の音楽論において日本近代の西洋音楽の移入と創出の問題を見出した吉田に、模倣、反復、そして変形を経た結実へのまなざしを読み取るものである。

終章「結論と課題」では、これまでの本研究のテーマを振り返りつつ、作品における典拠・原典の指摘と、その引用・変形の操作の抽出、そして、新たに生成したテキストの意義と価値について提案するという方法を確認するが、これらの作業を実体的な作品言説において行うだけでは不十分であり、あくまでも文学的な実像としての作者の方法を見出しながら、そこに読者の参加を要請するものであることが明記される。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文の研究テーマと研究方法に関わる理論的な位置、また、本論文全体の趣

旨については、序章「反復と変形―翻案・引用、そして方法としてのパロディ―」において詳述されている。本研究の出発点は、明治以降に出発した日本近代文学の作品が明治以前の古典作品、あるいは西欧の文学作品を典拠としてどのように運用しているかという準拠の方法を追究し、その内実を明確にしようとするものであり、その問題提起自体は特に新しいものではなく、いわゆる「準拠説」として古典文学研究の伝統的な研究作業であったし、近現代文学研究においてもしばしば追究されてきた研究分野でもある。そしてこの作業は訓詁注釈という文学研究の基礎作業のうちに生まれ、作品生成あるいは原作者の創作の起源へ遡及したいという願いに支えられながら、その意義を承認されてきているものでもある。しかし、語彙や修辭といった訓詁注釈の水準を超えて、大きな文脈から作品評価の根幹である主題にも関わるような準拠が見いだせる場合、すなわち、作者が原典を準拠とし、翻案・引用が明確になされていると認定される作品においては、従来の文学研究ではその作品評価の段階で、準拠を有する作品は原典

(オリジナル) に対する複製 (レプリカ) として劣位にあると評価される傾向にあったことは否めない。したがって、翻案作品と認定されたものはそれだけを以て研究対象から退けられるものであった。しかし、本研究の問題提起と理論的考察は、これまでの準拠概念を一新し、文学研究の価値観を改め、翻案とされた現象をテキストにおける典拠の反復／変形と積極的に捉えなおし、その操作における価値を新たに見出そうとする試みである。

文学作品における先行テキストの翻案・引用とは反復の可能性の表れであり、概念的あるいは文面的なテキストの変形として現象し、必然的に典拠との差異を生み出すに至る。こうしたテキストの作用そのものが本質的なものであるとは「間テキスト性」概念として周知のことであるが、本研究は、こうした反復／変形のプロセスから明確化するテキスト間の差異の生成に注目し、その要因を明らかにした上で当該作品の新たな評価を試みる。次に、その差異を契機として読者において発動するテキストの批評性を「パロディ」と指摘し、その作用の意味と

価値を提案するものである。したがって、本研究の理論的姿勢はオーソドックスなものの中にテキスト生成の契機を探ろうとした意欲的な試みであると言える。

本研究のこうした理論的射程は、第一部の澁澤龍彦研究に費やされた時間と苦心によって醸成されたものと見られる。すなわち、既に澁澤作品の個性的なありようとその評価は揺るぎないものであるが、研究対象として分析検討される領域では、数多くの引用・翻案を指摘し、真正な意味での換骨奪胎を認める水準でしかなかったが、そのブリコラージュの手法から何故に澁澤龍彦という表現者の個性が立ち上がってくるのか、といったテキストの作用を追究することが極めて困難であった。この文学的実像としての澁澤龍彦をどう分析評価するかにおいて、本研究の実践は今後の澁澤龍彦作品研究の指標となりうる成果をあげたと評価できる。また、第二部はこの分析方法を以て近現代文学の主要な作品を考察したものであるが、そこに試みられている作品群は、本研究の分析方法に適合するよう

な恣意的な選択基準を採用しているものではなく、「反復・変形」というテクストの作用が文学には本質的なものであり、特に近現代文学作品の多くに見られるだけではなく、その考察によって近現代小説の方法、描写と語りのリアリズム、作中に「私」として発動する一人称のダイナミズムといった近現代文学研究の多くの問題提起へも接続する可能性をうかがわせるものでもある。本論文では、この第二部における芥川龍之介作品への考察は、芥川作品に準拠が非常に多いということもあって、大きな示唆を与えるものであるし、太宰治作品の考察も近代小説文体の仕組みを提示しうるという視野の広がりを示している。また、石川淳作品論では昭和十年代以降において、小説において歴史をいかに語るかというテーマが追究されていく内実が検討されている。そして、第三部では日本近代の西洋音楽の受容から、日本の洋楽創始までを考察する試みであり、この流れの中で永井荷風、福永武彦、吉田秀和といった小説家、文筆家の記述行為に西洋音楽の受容と生成のプロセスをみるが、この動きのなかに本研究のテーマを探ろうとした、

応用編とも言える。永井荷風による西洋音楽受容の形跡とその文章に注目する吉田秀和の音楽理念の検討は近現代洋楽史へ一石を投ずるものとなっており、今後の展開に期待するものである。

さて、本研究の特徴が従来の基礎的研究作業の操作を基盤としながら、そこに近年の文学研究が新たに抱えてきた問題提起を組み込み、新たな研究の地平を拓こうとする意欲的なものであるのは間違いないが、先行テキストの反復・変形の操作、及び、典拠に対する差異の析出というプロセスまでは、その対象作品の文面において客観的に分析・考察しうるものであるのに対し、差異化された作品においての新たな意味や価値がその文面に明確なものとして指摘しうるかどうか。つまり、その時に現れるとする批評性とは、既に、読者の介入を前提にした「読み」の作用として起こりうるものではないかという疑問も棄てきれない。たとえば、〈書き換え〉という操作が存在するという判断から発生するはずの意味や価値の考察が、作者という書き手の主体性を確立する方向に向かうのならば、旧作

家論へ回収されてしまう。あるいは、書き手の書く行為自体の活動における作用として、読み手に喚起される実像の創出過程を考察するのであるならば、先の反復・変形の操作プロセスから批評性の獲得に至る狭間を埋める理論が期待されるところであり、ここに本研究の大きな課題があろう。

しかし、本論文が示したことは日本近現代文学における既定の作品研究に止まらず、日本近現代文学研究のこれまでを踏まえた上で、これからへの大きな問いを模索しようという生産性に満ちていることは確かであり、かつ、大いに評価できるところである。よって、本論文の提出者である安西晋二氏は、博士（文学）の学位を授与される資格があるものと認められる。

平成二十七年二月十四日

主查 國學院大學教授

石川 則夫 ①

副查 國學院大學准教授

井上 明芳 ①

副查 埼玉大學教授

杉浦 晋 ①

安西 晋一 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士(文学)の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十六年十二月二十二日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	石川 則夫	Ⓔ
副査	國學院大學准教授	井上 明芳	Ⓔ
副査	埼玉大学教授	杉浦 晋	Ⓔ